

京都探究ワーク **伝統産業**



京都の伝統産業について知ろう。

京都には、国の「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（略称：伝産法）」で指定されている工芸品が17品目あります。このうち、下記の3つの説明に合う工芸品はそれぞれどれか。右欄の名称と下の写真の番号を組み合わせ書き込もう。

解説 >>>リンク

工芸品の種類

京繻 <small>ぬい</small>	京小紋 <small>こもん</small>	京漆器 <small>しっき</small>	京石工芸品
京人形 <small>じんぎょう</small>	京扇子 <small>せんす</small>	西陣織 <small>にしじんおり</small>	京鹿の子絞 <small>か しぼり</small>
京表具 <small>ひょうぐ</small>	京仏壇 <small>ぶつだん</small>	京うちわ	京黒紋付染 <small>もんつきぞめ</small>
京指物 <small>さしもの</small>	京仏具	京くみひも	京焼・清水焼 <small>きよみず</small>
京友禅 <small>ゆうぜん</small>			

写真提供：京都市



写真番号	工芸品名
③	西陣織

平安時代に朝廷の織物を作っていた頃から技術が受け継がれ、時代とともに洗練されながら発展して京都を代表する伝統産業となりました。応仁の乱で東軍と西軍が争ったときに、西軍がこの織物の産地に陣を構えていたことから、のちにこれに由来する名前が付けました。図案の企画から仕上げるまでに10以上の工程があり、分業によってそれぞれ高度な伝統技術を身につけた職人の手で作られます。

写真番号	工芸品名
④	京扇子

日本が発祥とされ、平安時代初期に作られ始めた「ひのぎ松扇」（薄いヒノキ板をつづったもの）が最古のものといわれています。室町時代になると、竹と紙を材料に「かみせん紙扇」が作られ、涼むための実用的な使い方以外に、能や狂言、茶や香など、芸事や儀式、祝い事に使うようになり、豊富な種類が生まれました。職人の分業による87の制作工程を経て生み出される、美しさと繊細さと実用性を兼ね備えた上品な工芸品です。

写真番号	工芸品名
②	京漆器

中国から伝わり、最古のものは法隆寺の玉虫厨子に使われていた技法をもとに、京都独自の技術が発達しました。木や竹の木地作りから地固め、布着せ、錆付けを施した後で、塗りと研ぎの工程が繰り返され、最後に蒔絵や螺鈿などの加飾がなされます。食器類や茶道具、家具などが作られ、江戸時代には本阿弥光悦や尾形光琳など、書や絵画で優れた作品を残す芸術家が、この工芸でも優れた装飾美を生み出しました。

京都では、上記の国指定の伝統工芸品のほかにも、きょうしつぽう京七宝やからかみ京竹芸、ねんじゆ唐紙やねんじゆ念珠玉、ろうそく京こまやろうそく和蝋燭など70品目以上の伝統工芸品が作られています。



伝統産業の未来を考えよう。

左の文章を読んで、あなたの地元や京都の伝統工芸品の技術を活用した新商品や新しい使い方・売り込み方など、伝統産業を活性化させるにはどうすればよいか、自分のアイデアを絵や文章で表わそう。

日本の伝統産業を取り巻く現状

全国的に伝統工芸品の生産高は1983（昭和58）年頃をピークに減少を続けています。また、それに伴って職人の数も減り続けており、日本の伝統産業の衰退が問題になっています。そんな中、この状況を打開しようと、若手職人を中心にイノベーション（技術革新・新しい価値の創造）を起こす動きが出てきています。

《新しい伝統工芸・伝統産業のすがた》

（商品化された例）

明治8年創業の茶筒工房と電機メーカーが共同で開発したワイヤレススピーカー

京都の開花堂とパナソニックの共同開発によるもので、茶筒の高い密封性を生かして手のひらの上で音の響きを感じる音楽体験が楽しめます。

>>>リンク Panasonic「響筒」

その他、商品化された例をウェブサイトでいくつか紹介します。解説 >>>リンク